YAMAHA Marine News

2006 No.156

YAMAHA Now: 2006東京国際Boat Show

特集: F.A.S.T.26で仕掛けるフィッシングユーザーへのアプローチ

NEW MODEL INFORMATION

2006東京国際ボートショー開幕
「海・とびきりの週末」でヤマハマリンをPR

「海は、ワンダーフィールド。冒険はこれから！」をテーマに2月9日(木)から12日(日)まで開催された2006東京国際ボートショーには182社が出展し、ボート、ヨットともに前回の出展数を上回り、週末には大勢の来場者で賑わいを見せていました。

そのような中ヤマハでは「海・とびきりの週末」というテーマでブースを展開しY-38コンバーチブルや参考出品となったNew32コンバーチブルなどを中心にYFやCRシリーズ等を展示しました。またブース中央では4月より始まる【シースタイル】のインフォメーションを行い、新規ユーザーの動員やレンタルボートクラブの退会者からの再入会も見られ、先行予約は予想以上の申し込みがありました。

今回のボートショーにおけるヤマハブース来場者へのアンケートの傾向としては新規や初心者層からはクルージングボートが、また既存ユーザーからはフィッシングボートに対して好感度が高く、希望するボートサイズでは17から28ftまでのクラスで約50%を占める結果が出ています。出展モデルではCR-28やYF-23EXへの注目度が高く、「保管場所がクリアできれば購入したい」という来場者の意見も聞くことができました。なお、来年の東京国際ボートショーは場所をパシフィコ横浜に移して開催する予定です。

先行予約が行なわれた「シースタイル」は予想を上回る入会申し込みがあった

Y-38、New32のビッグボートモデルには多くの注目が集まった

マリンジェットコーナーにも多くの注目が集まった

NEW MODEL INFORMATION

Y-31 SF

Y-31CONVERTIBLEをベースにスポーツフィッシングテイストを強調。対座シートからL字型にシートレイアウトを変更し、釣行時の仮眠対応やシート下の収納を増設した。また床材には濡れた靴で歩いても滑りにくいノンスリップ材としたほか、シート素材は汚れが着きにくいPVC素材を採用し、フィッシングボートとしての実用面を高めた。

主要諸元 ●全長:9.99m●全幅:3.2m●全深さ:1.99m●定員:12名●船体重量:3,491kg●燃料タンク:600ℓ●総トン数:4.9t●最大搭載馬力:169kW(230ps)×2/SX422KM●航行区域:限沿/沿海

UF-30ⅡS/D

係留場所制限への対応や容易な操船を求めるフィッシングユーザーの代替を促進させるニューモデル。2名分の仮眠スペースを設けたバウバースや1名分のアンダーバースを擁するキャビンはFC系オーナーからの代替も見込めるレイアウトとした。UF-27I/Bに続くヤンマーとの共同開発艇。

主要諸元( )は4LHS ●全長:9.52m●全幅:2.64m●全深さ:1.41m●定員:11名●船体重量:2,680(2670)kg●燃料タンク:300ℓ●最大搭載馬力:173kW(235ps)●航行区域:限定沿海●搭載機関:6LP-DTZY/4LHS-UTZAY

24Siesta FV

キャビン付きのマルチフィッシングボートがコンセプト。キャビン内のクッションをPVCレザーとしたほか、ボートフィッシングに便利なフリーフォールウィンドラスや、アフトステーションBOXのオプション対応を設定。装備面をシンプルに見直しF150とのパッケージ艇とすることで購入しやすい価格設定とした。

主要諸元 ●全長:7.88m●全幅:2.63m●全深さ:1.41m●定員:10名●船体重量:1,650kg●燃料タンク:200ℓ●総トン数:3.2t●最大搭載馬力:110.3kW(150ps)●航行区域:限定沿海

AG-21BR

ウェイクボーダーからの人気が高いバウライダーを採用したモデル。AG-21SPの性能、デッキレイアウトはそのままに二人が座れるバウデッキスペースを確保した。AG-21専用カラー「オレンジフレイク」を新たに設定したほか、シート形状も破けにくい仕様とした。

主要諸元( )はEX ●全長:6.65m●全幅:2.30m●全深さ:1.10m●定員:8名●船体重量:1,013(1,020)kg●燃料タンク:110ℓ●最大搭載馬力:110.3kW(150ps)●搭載機関:F115A/F150A●航行区域:平水

F250搭載モデル「YF-27/EX」「LUXAIR」

ヤマハ4ストローク船外機最大馬力のF250を搭載した「YF-27/EX」「LUXAIR」を発売しております。両艇ともF225搭載モデルと比較した場合、艇体価格は+104,000円です。多くのお客様にお知らせ頂くと共に、拡販のご協力をお願いします。

1.9%低金利キャンペーン

春の拡販シーズンにあわせて、実質年利1.9%低金利クレジットをご用意しました。お客様のご要望に合わせてご提案をお願いします。

対象艇種

●ボートDクラス ●ボートCクラス ●ボートFWクラス
全モデル及び
●F.A.S.T.26 ●FG-25S/D

■適用期間:~4月30日まで
■クレジット取組回数:6~60回
※詳細につきましては担当営業までお問い合わせください。

F.A.S.T.26で仕掛ける フィッシングユーザーへのアプローチ

昨年秋にデビューしたF.A.S.T.26は、瀬戸内海に代表される日本の内水面でのフィッシングを念頭に開発されたまったく新しいコンセプトのフィッシングボート。

船外機ならではの加速性と、瀬戸内特有のチョッピーな三角波をものともしない走波性、船外機艇には不利とされた「流し釣り」での向風位性を確保したF.A.S.T.26は、瀬戸内のみならずボトムフィッシングを楽しむボートフィッシャーにとっては「待っていたボート」だったといえそうだ。今回は「岡山マリン」さんと「エヒメマリン」さんの販売事例を追った。

ボートデータ
●全長:8.40m ●全幅:2.45m ●全深さ:1.23m ●艇体質量:1,273kg
●最大搭載船外機:4ストローク150馬力 ●燃料タンク容量:160ℓ ●定員8名 ●航行区域:限定沿海

■ 取材協力

岡山マリン

エヒメマリン

乗ってみて初めてわかる相性の良さ

F.A.S.T.26の企画・設計にあたっては、瀬戸内海に面した中国エリアの販売店様の意見が大きく採用された。

「瀬戸内特有の三角波に強く、舷が高くなくて釣りやすく、このあたりで盛んな『流し釣り』に適したボート。企画段階で私たちが主張したのはこの3点で、できあがったF.A.S.T.26にはこの3つの要素が過不足なく盛り込まれていると感じています」

と語るのは、ヤマハボートの売り上げで平成4年から13年連続首位という記録を打ち立てた岡山マリンの武田常務。同社ではすでに44件の契約を取り付けている（3月4日現在）。

「秋の試乗会での反応がよかったので、これからシーズンに向けて期待できると思います。好評だったのは予想通り波切りの良さとスピードですね。ただ、26ftにしてはハルにボリューム感がないので、展示しておくだけではその魅力が伝わらない。ウチでもYF-23と並べて展示しているんですが3ftの差が感じられないんです。だから、この船は実際にどんどん乗ってもらうことで魅力を感じていただくことが大切だと思います」

岡山マリンの販売第一号艇のオーナー、谷本彰男さん（58歳）も試乗会で感じたフィーリングの良さに一目惚れしたという。

「試乗会でフェリーの引き波を越えたとき、このサイズでは考えられないくらいソフトに越えたんです。叩かれる感じは全くなくて、これなら瀬戸内のチョッピーな海面もストレスなく走れるな、と。4ストロークの船外機は初めてなんですけど、予想以上にエンジン音が静かで快適。船外機の耐久性については未知数だったんですけど、ヤマハの製品だから信頼できるだろうということで（購入に）踏み切りました」

23歳の頃、10ft艇から乗り始めたという谷本さんにとって、今回のF.A.S.T.26はなんと15艇目。現在はPC-31も同時に所有しているベテラン中のベテランである。

「瀬戸内を走る分にはPC-31よりも快適に感じます。31でも多少セーブして走らないと叩かれますけど、これなら走っても叩かれるような感じはほとんどなくて、スプレーもきれいに左右に分かれて飛沫をかぶることもない。ポイントへの移動は本当にラクになりました。計算外だったのはオプション装備で100万円以上かかったことかな（笑）」

流し釣りで威力を発揮する補機やスパンカーはすべてオプション設定となっている。

「谷本さんの場合は、当社の特製オーニングもつけているということもありますけど……。このサイズで500万円を切る価格は魅力的ですが、フル装備となるとそれなりの価格になりますね。ただ、この設定はお客様のニーズに合わせることができるという点では、セールスにおいてメリットにもなる。実際、ウチで契約した4件についても2件はフルオプションでF.A.S.T.26のポテンシャルを最大限に堪能するという形、残りの2件は標準装備で初期費用を低く抑えてという形ですから、お客様の選択肢を増やすものだという形で捉えています」（武田常務）

谷本さんのF.A.S.T.26は、岡山マリン・オリジナルのキャンバストップを装備。写真のように片舷ずつ巻き上げて収納することができ、走行時もバタつかないのが特長

フル装備のコクピット。窓面が大きく、視認性は極めて良好とのこと。オプションの補機船外機もコクピットで操作することができ、使い勝手が良いと評判だ

ボート歴35年、15艇ものプレジャーボートを乗り継ぎ目の肥えた谷本オーナーも、F.A.S.T.26のポテンシャルには納得の表情

県内最大規模を誇る岡山マリン・宮浦マリーナ。シーズン中は3基のクレーンがフル稼働し、太公望の週末をサポートしている

ファミリーユースの提案でマーケットに新たな広がり

瀬戸内海を挟んだ対岸の四国エリアでもF・A・S・T・26は新たなマーケットを開拓する可能性を示唆しつつあるようだ。

「YD-24から買い換えのお客様（50代）なんですが、当初は漁船タイプのDY-27をご希望されていたんです。ちょうどその頃ニューボートとして発表されたF・A・S・T・26を勧めたところ、20代の息子さんが大いに興味を示された。オーナーご自身は長くボートに乗ってらっしゃる方なんですが、これまで全くと言っていいほど無関心だった息子さんが、F・A・S・T・26のパンフレットを出すと食い入るように見始めたんです」

と語るのは、愛媛県松山市に店を構えるエヒメマリンの営業部長・島本泰憲さん。

「このあたりのフィッシングボートのオーナーには、根強いディーゼル信仰があるんです。ランニングコストという側面ももちろんあるんですが、釣りのプロである漁師のスタイルに憧れるような風潮が、ここ松山にはあるみたいなんです。だから、ボートも漁船タイプのものが圧倒的に支持されて、F・A・S・T・26のようなプレジャー寄りのコンセプトは敬遠されがちで、オーナー自身の好みでいけばやはりDY-27のようなんですが、これまで自分の趣味に無関心だった息子さんが興味を示されたということでF・A・S・T・26に決められたようです。小さいけれどキャビンもあって、奥様やお子さんと一緒に楽しめるという絵が描けたんじゃないでしょうか。購入が決まるやいなや、息子さんもボート免許を取得されましたよ（笑）」

12～2月にかけて松山近辺の海は大時化だったため進水はまだだが（3月3日現在）、売約済みのF・A・S・T・26は艤装を終え、エヒメマリンさんが経営する粟井坂マリーナで後は進水式を待つばかりの状態。

「このオーナーはもともと漁港に係留されていた方なんですが、ボートがカッコイイのでとりあえず1年間はマリーナで管理することにされました。ボートが古びるまではマリーナに置かれるんじゃないでしょうか？　これまでは、完全に釣りに特化した遊び方で、それはまるで漁師のようでしたが、ファミリーユースを考えるなら漁港よりマリーナの方がいいですもんね」

全く新しいコンセプトを持つF・A・S・T・26は、従来の遊び方を変えていく力も持ち合わせているようだ。

とはいえ、もちろんフィッシングボートとしてのポテンシャルも漁船タイプに劣るものではない。

「この辺りでは『流し釣り』といって、アンカリングせずに潮とともに流れながらの底モノ釣りが主流なんですが、これが船外機だとスムーズに船尾が流れないために安定して風位に立ちにくいという弱点があったわけです。これをF・A・S・T・26では補機船外機を搭載することでメインエンジンをチルトアップというシステムを採用したことで、スパンカーを張ればまるでアンカーを入れたようにきれいに風位に立って安定する。この点で漁船タイプに劣る部分はないでしょうね。さらに漁船タイプにはないスピードがありますから、自信を持ってお客様にお勧めできるボートだと思います」

松山周辺の海域は、海底の形状が複雑でポイントとなるエリアが狭い範囲で限定されるため、ピンポイントで狙えるだけの操船技術が要求されるという。操縦席から補機を自由にコントロールできるF・A・S・T・26は、ボート歴の浅いユーザーにとっても強い味方になりそうだ。

「23カディやタックル23の買い換え需要がターゲットとなりそうです。この場合、F115で420万円台、F150で470万円台という価格は魅力ですね。下取りで150万円として、トータル300万円台ということなら、自家用車の買い換えサイクルを1回見送ることで新艇をどうですか？というセールストークができる。60回払いなら、金利を含めても月々5万数千円。これが500万円を超えるとなるとなかなか動きませんから。あと、根強いディーゼル信仰を切り崩すためには、ファミリーユースの提案ですね。ボートライフにご家族を巻き込むことで、釣り一辺倒の松山のマーケットに広がりを持たせる、それが可能なボートだと思います、F・A・S・T・26は」。

すでに多くのユーザーから注目を集めている中で、両店とも基本的な性能をアピールし、オプション設定をうまく活用することで販売につなげている。ボトムフィッシング志向の強いユーザーからは特にレスポンスがいいと言われるF・A・S・T・26。今シーズンの拡販商品として、両店では大いに期待が持てる商品だと手応えを掴んでいた。

エヒメマリン販売第1号艇のF.A.S.T.26。こちらも補機船外機が装備されていた

技術自慢の粟井坂マリーナスタッフの面々。写真後は島本営業部長。前列中央が島本専務

90年代に保有艇が増加したため、3階建ての艇置場を整備したエヒメマリン粟井坂マリーナ

マリーナは防波堤の内側にあるためすべてて陸置きバース。写真右奥が上下架用の大型クレーン

屋根付きのバースも多数確保されているため、マイボートを大切に保管したいオーナーが集まっているようだ

Hello MJ Shop

アクアティックス（有）
静岡県静岡市

■データ
●創　　業：平成元年
●スタッフ：2名
●主力商材：FX、VXなど
●商　　圏：静岡県内（三保～相良）
●客　　層：20代から40代まで

MJで楽しむ環境の提案が顧客を定着化させる

ショップの裏には納艇待ちのMJが。秋と春の点検シーズンが代替ニーズを探るチャンスになっている

ショップ内には消耗品からトーイング用品まで所狭しと展示されている。またネット通販も展開されている

店舗は国道沿いにあり、展示のMJを見て来店されるお客様も多い

MJの良きアドバイザーとしてユーザーに慕われるアクアティックスの天野靖彦社長

海水浴場や海浜公園、フィッシャリーナなどが集う用宗地区は静岡市内でもマリンプレイが盛んな場所として知られ、今回訪ねたアクアティックスさんもこの用宗に隣接する駿河区に店舗を構えています。

「お店をオープンさせたのはちょうど平成元年です。もともと趣味から始まった商売ですから、その時々のお客様に支えられてここまで続けられることができたと思っています」

静岡市内のユーザーから支持されているアクアティックスの天野靖彦さんは謙遜しながらも現状をしっかりと見据えたMJビジネスを展開されています。

「多くの方々がMJに興味を持たれていた時代とは違って、今のお客様は数あるレジャーの中からMJを選ばれています。そうしたお客様にとって、どういったサービスが一番喜ばれるのか？　また、どのぐらいの距離を保っていれば一番いいのか？　答えはお客様によって違うんですが、そのことはいつでも頭の片隅にありますね」

アクアティックスさんが抱える現在のお客様はおおよそ500人。「スタッフが2人しかいないから夏はどうしようもない」と天野さんは苦笑しますが、年間を通じて稼働するフリースタイル系やレース系のユーザーを中心に、クルージング、トーイングなど遊びに偏りが見られないのがこの地域の特徴です。またアクアティックスさんもお客様のMJライフに合わせて新艇の提案を行い着実にユーザーを育てています。

ショップから車で10分ほどの場所にある用宗漁港のスロープはMJユーザーにも開放されている。行政と漁協、ショップとユーザーのそれぞれが協力し合い運営ができている

「MJの販売台数が年々減っているのが現状ですが、お客様が遊んでいないか？　というと、そうとも言い切れない。昔に比べて一番変わったのはマシンが壊れないと言うことでしょうね。中古を買うお客様に聞いても故障に対するシビアさは、以前とは比べものにならないぐらいエンジンを信頼している。昔なら新艇購入のお客様が今は中古に流れるケースも多いと思います。うちもお客様の点検時期に合わせてニューモデルの情報を伝えて極力新艇を薦めていますが、昔のように言われる通りに購入するお客様よりも、自分自身の考え方で商品を選ぶことが多いので、私たちはその判断をサポートする役に徹した方がいいと思います」

天野さんによれば売り上げは艇体販売とサービス、用品販売がほぼ同じ割合。艇体販売こそ伸び悩んではいるものの、ユーザーのニーズを踏まえたサービスやウェブショッピングなどを取り入れた用品販売は堅調に推移しているといいます。また、年に一度は西伊豆ツーリングなどのイベントも行うほか、各ゲレンデの調整なども行いジェットユーザーが楽しく遊べる環境作りにも注力されています。

「お客様はトレーラブルで楽しまれているので、各ゲレンデの管理側の方とは協力体制を築いてお客様にトラブルがないように指導しています。もっとゲレンデを増やすように行政の方にも働きかけをしているのですが、まずは今ある場所でトラブルなく楽しんでいる実績を作ることが、これからのために大切ですからね」

販売と同様に環境整備やユーザー啓発が必要不可欠と指摘する天野さん。MJの認知向上とファン化の拡大を目指し、地道な取り組みが続けられていました。

YAMAHA WORLD

Command Link

家電製品に限らず航空機や自動車などデジタル化の波はあらゆる分野で進んでいますが、プレジャーボートもその例外ではありません。ヤマハ船外機でもダイアグノシスなどでデジタル技術を応用し、船外機の信頼性向上を図ってきましたが、このたび発表したコマンドリンクは、そのデジタル技術をさらに発展さたものです。

コマンドリンクのシステムはヤマハ船外機用のタコメータやスピードメータ等とその配線やセンサ類により構成されています。そして、これらをエンジン制御モジュール(ECM)とデジタル通信技術で直接つなげることにより、従来の複雑な配線を1本の通信ケーブルに置き換えるばかりでなく、メータを通じて多彩なエンジン情報(エンジン状態、航行状態、各種警告やメンテナンスメッセージなど)を伝えることが可能となり、操船者に対しては信頼性や安心感を与えることができます。

このコマンドリンクでは、表示させることのできるスピードメータの情報は、船外機組み込み式のセンサから取る方法に加えて、水深・水温・スピードを一体型とした艇体取り付け型センサを新たに追加したほか、GPS装着艇では、GPSからスピード情報などを取り出して表示させることも可能。メータパネルは2種類の形状を用意し、従来の6Y5デジタルメータでおなじみの丸型に加え、表示面を拡張した四角型を新たに追加し、表示される文字を大きくすることで視認性を向上させています。さらに、販売店様での船外機艤装時の利便性を重視しており、艇体はそのままにエンジンとメーターだけを交換する際にも、作業が簡単に済むようになっています。

さまざまな情報をいかにわかりやすく伝えることができるか？　コマンドリンクには、刻一刻と変化する状況を操船者に対して正確に伝える為の、高品質なシステムとして今後も開発が進められる予定です。

YAMAHA

ヤマハマリンニュースNo.156 ●発行日／2006年4月10日 ●発行所／ヤマハ発動機株式会社 広報・秘書ユニット宣伝CRMグループ 〒438-8501 静岡県磐田市新貝2500

●製品の情報サイトは www.yamaha-motor.jp/marine/ ●遊びの情報サイトは 21yamaha.com

この印刷物に掲載する記事等を無断転載・無断使用する事はお断りいたします。

この印刷物は再生紙を使用しています。